

ゆるふーⅧ

まなキキ・オンライン講読会

『主体性と真理』第1講

一九八一年一月七日「象の寓話から」他

2026年5月12日

Mせんせい

■ 象の寓話

\\高潔な象がもたらす教訓は、よき一夫一婦婚について・政党で適切な性行動について///

- ・ 聖フランソワ・ド・サールは、好ましい夫婦像として・霊性の観点から、象の寓話を引用
 - 象は大きな獣にすぎないが、地上の生き物のなかで最も立派で、分別を持っている
 - 象は決して違うメスを愛さず、選んだメスをやさしく愛する。このメスとは三年ごとにしか交尾せず、しかもたった五日のあいだ、この行為を見られることがないように大変ひそやかに交わる
 - 群れへと戻る前に、体を前もって清める
 - 自然が人類に与えることのできるあらゆる模範、あらゆる教訓の中で、象の事例は明らかに最も推奨されるべき者の一つ
 - 結婚しているすべてのキリスト教徒が模範とすべき
 - :ひとたび事が終われば、結婚している人々は自らの使命の一部をなす快楽や快感を、象にならってすぐさま洗い清めなければならない
 - :好ましい夫婦のモデルと象徴
 - ・ 博物学者の著者・アルドロヴァンディも、象を道徳性の最も高潔な形象に位置づけている
 - 象の鷹揚さ、節制、公平さ、貞節、寛容さ
 - 象は理性的でないものすべてを嫌悪し、空虚な発言や無駄なおしゃべりを好まない
 - 象は良俗や美徳にとっての真の手本
-
- ・ ビュフォンも象を偉大な社会的美德と結び付ける(欲望の激しさ・秘されることで増す快楽の強度に力点)
 - 象は慎み深く勇敢で、冷静で、従順で、その友に忠実
 - 愛情関係における著しい誠実さ、激しさ、謹み
 - 「象たちは最も鬱蒼と茂った森を探し、この上なく深い静寂にたどり着いて、誰にも見られず、邪魔もされず、自然のあらゆる衝動に、遠慮なく身を任せる。この衝動が強く、長く続くものであればあるほど、より稀で、より長く待ち望まれていたものである。

■ 象の寓話の歴史 p6, L1-

- 象の寓話の歴史はとても古く、数世紀にわたって受け継がれてきた
 - 宗教改革あるいは反宗教改革の倫理的厳格さや近代の夫婦の美德であると一般に信じられているものの構築とともに出現したものではない。
 - 『フィシオログス(キリスト教的動物譚。中世にとって参照すべきテキストのひとつ)』で言及される象がまとっている聖書的特徴

- キリスト教徒の著者たちは、夫婦間の行動に対する教訓を、道徳性に関する古い動物譚に求めた初めての人々ではない
- アリストテレスにまでさかのぼると象の寓話は消える。
 - ・ アリストテレスは象についてよく語り、後に見出せる諸要素のうちいくつかを挙げているが、人間の道徳性の規範にしようとはしていない
 - アリストテレス以前に、ギリシア人たちはただたんに象を知らなかった
 - ギリシア人たちにおいて、自然の道徳的模範生というテーマがいずれにせよそれほど古いものではない
 - 自然の体系的読解を行うという考え、人間の行動にとっての道徳性の教訓をつねに、その各要素の中に持っている自然を読解するという考えは、アリストテレス以降の発想
- 自然が人類にとって行動の不変の教訓をもたらすためには、少なくとも二つの根本的な観念が結びつく必要があった
 - ◇ 自然は全体的で一貫したひとつの合理性によって支配されているものと考えなければならない、という観念
 - 世界の一般的で合理的な統治としての自然の観念、動物誌の異なる諸要素を、人間の行動の恒常的な凡例として機能させるために必要な統治としての自然の観念
 - ◇ 人間の行動を支配すべき法律は、都市国家に負うものだけでなく、さらに根本的には、その都市に固有の法律に従属する以前に、個々人や人間存在が世界のある秩序に従わなければならない、という観念
- 一種の道徳的テーマ群あるいはイデオロギーであり、他方ではひとつのコスモロジー全体
 - ヘレニズム思想とヘレニズム世界の歴史的、社会的、政治的諸変容に属するもの
 - ゆえに、アリストテレス以前には見出されない

■ 今年の講義:「主体性と真理」の講義を動物性についての寓話で始める理由 (P13, L1-)

第一の理由) 問いの性質自体に関係

第二の理由) 問いを立てたい歴史的領域に関係

第三の理由) 用いたい方法に関係

● **理由1.** 主体性と真理を問う「型」の提案

型1. 哲学的方法	⇔型2. 実証主義的方法
任意の主体にとっての真理の可能性の問い全般	主体性に関して真を述べることの可能性について問うもの
<ul style="list-style-type: none"> - いかなる条件で私は真なるものを認識できるのか - ある認識する主体に固有の経験としての認識が、いかにして可能になるか 	<ul style="list-style-type: none"> - 主体について、真なる認識を持つことは可能か - いかなる条件において、主体の真なる認識を持つことができるのか

<ul style="list-style-type: none"> - 主体が、問題となっている認識が真の認識であることを何によって認めることができるのか ➤ 二つの命題の緊張関係を解決することを目指そうとするもの <ul style="list-style-type: none"> - 主体なき真理は存在せず、真理はその主体に対してのみ真 - 主体がある主体であるとき、いかにしてその主体は真理に接近することができるのか 	<ul style="list-style-type: none"> - 主体について、主体の経験の形式と内容について、任意の客体(対象)についての認識に固有な手続きや基準を援用することは技術的に可能で、理論的に正当か ➤ ある主体にとってのみ真理が存在するのにも関わらず、いかにして主体一般の真理が存在しうるのか
--	---

● フーコーは第三の型を提案:歴史的-哲学的方法 (p14, L3-)

主体性に対しての、それについての真理を述べると主張するある言説の存在の効果はいかなるものかを問う

- ・ 主体が自分自身について、真であると思われる何ものかを認める可能性あるいは義務の中に置かれているとしたら、主体は自分自身についていかなる経験ができるのか
- ・ 主体が自分自身について持つ関係は、この関係が、希望のあるものであれ強いられたものであれ、自分自身についての真理の発見を通じたものでありうる、あるいはそうでなければならぬときに、いかなるものであるのか
- 根本的に歴史的な問い、事実に関する問い
 - 私たちの文化、文明、社会においては、制度的にあるいは合意によって、主体についての真なるものとして認められたいくつかの言説が存在する
 - ある文化において、主体についての真なる言説が存在するために、いかなる経験を主体は自分自身についてなし、そして自身についての真なる言説の事実としての存在に応じて、自分自身とのいかなる関係を主体は有するのか

● フーコーのこれまでの関心／議論 (P15, L8-)

- 狂った理性、病気の身体あるいは犯罪的性向についての真なる言説の存在と発展を含む実践の諸形態がいかにして形成されたか議論してきた
- 私たちが自分自身に対して持つ関係が——「自分自身に関して」という言葉で意味するのは、たんに私たちが私個人に関して持つそれではなく、私たち自身であるものとしての他者に対して持つ関係でもある——、この真なる言説の存在とそれがもたらす諸効果によって、それが課す義務とそれが提案するか明示する約束によって、いかにして影響され、変容され、支えられているのか
- 狂気や病気、死、そして犯罪を通じて私たちに宣される真理が存在し、存在しなければならないということが本当であるならば、私たちとは何で、いかに自分自身を導くべきなのか——

■ **これからなすべき仕事のための共通の土台** (P16, L1-)

1. 真理への関係から独立した主体の理論は存在しない

- ・ 主体性は、主体についてのあらかじめ準備された普遍的な理論に基づいては理解されないし、主体性は根源的あるいは創始的経験に関係づけられないし、普遍的価値を持つかもしれない一種の人間学に関係づけられもしない
- ・ 主体性は、それが自身に固有の真理に対して持つ関係において構成され、変容するものとして理解される

2. 紐帯、義務、政治としての真理を問う(≠認識の内容としての、認識の形式的構造としての真理)

- ・ 真理は普遍的に妥当であると考えられるような認識のある種の内容によって定義されるのではなく、形式的かつ普遍的なある種の基準によって定義されるのでもない
- 真理は諸々の義務の体系として本質的には理解される
 - いくつかの物事が実際に真なるものとして通っており、主体は、それらの物事を自分自身で生み出すか、あるいは受け入れるか、従属しなければならない

3. 種々の真理陳述の政治史を通じての、自己と他者についての諸経験の構成

- ・ どれほど真理が変りやすいか、主体の定義が相対的か、といったことは議論しない
- ・ どのようなやり方で自己と他者の諸経験としての主体性が真理の義務を通じて、真理陳述と呼びうるであろうものの紐帯を通じて構成されているかを示す

■ **セクシュアリティと呼ばれているものの領域** (P17, L6-)

これまでのテーマとの違い

	狂気、病気、死、犯罪	セクシュアリティ
1. セクシュアリティに対する私たちの両義性	拒絶の対象	拒絶と受容、好評と不評のつねにふくざつなゲームの対象
2. 真なる言説に主体がどうかかわるか	真なる言説の本質的なものは、主体に関してのものでありながらも、外部から、他者によって発されてきた :客観性という正しさを認められた規則に従った観察や、調査として与えられる何かに基づいて組織	性と欲望について、真なる言説は私たち自身の一部についての告白の言説を中心に組織される :(血縁関係などによって)結び付けられている社会において、いかなる仕方によって、主体が自分自身の言説のなかで、真実において欲望の主体として現れ、自分自身を承認するよう要請されているのかを探求する

● **理由2. 歴史的領域への注目** (P18, L21-)

- ・ 象の寓話:異教の文献とキリスト教の文献のあいだ・交流:興味深い歴史的問題を提起
 - 聖フランソワ・ド・サールやアルドロヴァンディは、象は人間の行動にとって手本であるとする

- 性のある倫理の根本的諸原理のみを強調→キリスト教に帰されるいくつかの原理に従属
 - ① 一夫一婦制のセクシュアリテ、断ち難い夫婦関係の原理。二人のパートナーのあいだの非常に強固な結びつきを前提とする
 - ② 性的関係における厳格なエコノミー(婚外の性的関係すべての断罪)
 - 希少性の原理:やり方や時間を問わず性交してはならない/生殖という目的のためだけの性的関係/妻が妊娠中の期間すべてにおいて妻に触れてはならない
 - ③ 性的活動の孤立の規則。性的関係とは、それが結婚した個人間の合法的な関係であっても、隠される何ものか
 - ④ 浄化の原理。性的関係の後の洗浄は必須
- アルドロヴァンディと聖フランソワ・ド・サールによって語られた象の模範に、キリスト教の道德とその内在的な陰鬱さへと私たちが慣習的に帰す、善きセクシュアリテについての一種の描写がある
- キリスト教徒の著者たちが私たちに示しているような象の性的な模範、「パターン」は、キリスト教以前に、完全にかつ明確に形成されていた。
 - セクシュアリテに関する私たちの根本的な道德的規範の起源について問いたくなるが…異教もキリスト教もひとつのまとまりとして扱うことはできない(経験のあらゆる多様性があった)
 - 私たちの道德がキリスト教的か異教徒的かを知るのではなく、いつ、どのように、いかなる過程の内部で、いかなる環境の内部で、いかなる実践あるいは制度の内部で、私たちの性道德の主要な諸要素が形成されてきたのか
 - あらゆる道德的問いは、それらの省察や問いに結びついており、それらに付き従う陰である歴史的問いを避けることはできない
- 異教的倫理とキリスト教的道德の転換点に注目する必要性

次回は、象の寓話を取り上げる第三の理由として方法の話から

感想

なぜ、象の話から…と思っていたが、主体性と真理について考えていくうえでセクシュアリテの話でなければならぬ理由がある程度説得されたような気持ちになった。

確かに、これまでの狂気や犯罪などを題材とした議論では、真理の言説が外部に存在し、その“真理”に個人が適応させられていくのか、(規律・訓練や環境型権力など…)議論してきた。でもセクシュアリテに関しては、必ずしも拒絶の対象と割り切られているわけではなく、かつ、その主体本人の経験や告白のようなものと不可分なのかもしれない(まだ、整理されきれていない気もするが)、だからこの領域なのか、という気持ちになった。

一方で、いかに真理に到達できるかでもなく、いかに真理を説明可能にするかでもなく、「真理」とされるものと主体の関係、主体がその真理にどうかかわるか、といった議論は、昨年度の話もあって興味深くありつつ、自分自身のものの考え方、捉え方として取り入れられるよう、もっとちゃんと理解したいと感じた。